

IFRIEセミナー

中上級日本語学習者の発話ストラテジー についての縦断的研究 —自然習得環境にいる学習者の場合—

人文社会科学研究所 文芸言語専攻
応用言語学領域
3年次 許 挺傑

発話ストラテジーとは？

例1

- 102 NNS1 はい、[先生の名前]先生はあのう、とし、としようけれども、
としようえ[↑]。[声が小さくなり、発話スピードも遅くなり]
- 103 NS1 とし、とし(とし)、としようえ[↑]。
- 104 NNS1 としようえ。
- 105 NS1 うん。
- 106 NNS1 としようけれども、(うん)かっこいい<笑い>。
- 107 NS1 ああ<笑い>。

●👉 確認要求

- ◇学習者が日本人との接触場面において話し手として会話に参加するときに、伝達内容を言語化する過程で起こる問題を解決する方法。

研究の枠組み

表1 発話ストラテジーの分類(横林(1991)、藤長(1996)を参考に)

自己解決	非目標言語による	Aコードスイッチ	母語(その他の外国語の使用も含む)
		B逐語訳	目標言語以外の言葉に逐語訳する
	目標言語による	C一般化	言葉が思い出せないときに、より一般的な言葉を使用
		Dパラフレーズ	語彙レベルでの言い換えと、文レベルでの説明的言い換え
		E造語	既知の語から必要な語を作り出し、L2のある規則を過剰に使用する
		F再構築	当初、考えていた文法・文型が作れないために、途中で他の文法・文型に変えて、文を構成し直すことで文を完成する
共同解決	G確認要求	語彙や、形の確認要求上昇イントネーションを用いることが多い	
	H理解の確認要求	伝達レベルでの容認可能性を求めるもの	
	I間接的アピール	間接的に相手に助けを求めるもの、文を途中まで言ったり、言いよどんだりして、運用力の限界を示すことによって、聞き手から必要な表現を引き出したり、発話の完成を手伝ってもらうもの	
	J直接的アピール	意味を知らない語彙、内容についてわからない、知らないことを伝えたり、意味が何かを問うもの	

先行研究の問題点

- 横断的研究が多い(大野2003,2004; 藤長1996; 武井1995;佐々木2007)が、縦断的な研究は少ない。
- 縦断的研究があっても、初級学習者を対象とするものが多く(荻原1996、野原2000、伊藤2000)、学習者がさらに上のレベルまで行く過程におけるストラテジーの使用が不明である。
- 分析方法にも問題がある(後述)

本研究の目的

- ◇課題1 発話ストラテジーの使用が滞日期間の長くなるにつれ、量的・質的(使用の形式など)にどのように変化するか？
- ◇課題2 発話ストラテジー使用の変化が言語能力や学習環境とどのように関係するか？
- ◇課題3 発話ストラテジー使用の成功率から見る言語能力とストラテジー能力との関係？

調査協力者および調査方法

学習者	性別	年齢	母語	学習時間・形態	備考(来日時)
NNS1	女性	22	中国語	4年間・大学	2級
NNS2	女性	21	中国語	3年間・大学	2級
NNS3	男性	28	中国語	6年間・独学	1級

◇調査期間

2008年5月(4月に来日)～2009年1月(9ヶ月間)

◇調査方法

- ・2か月ごとに一回、NS(日本人)と1対1の自由会話(20分)を録音
- ・随時に行われるフォローアップインタビュー

分析方法

NSとの会話(2~17分の15分)を文字化する(宇佐美(2007))



学習者の発話を「実質的発話」(杉戸(1987))と「あいづち的発話」とにわけ、15分の会話における実質的発話数を求める



15分の会話におけるストラテジー使用の回数を求める



ストラテジー使用回数 ÷ 実質的発話数



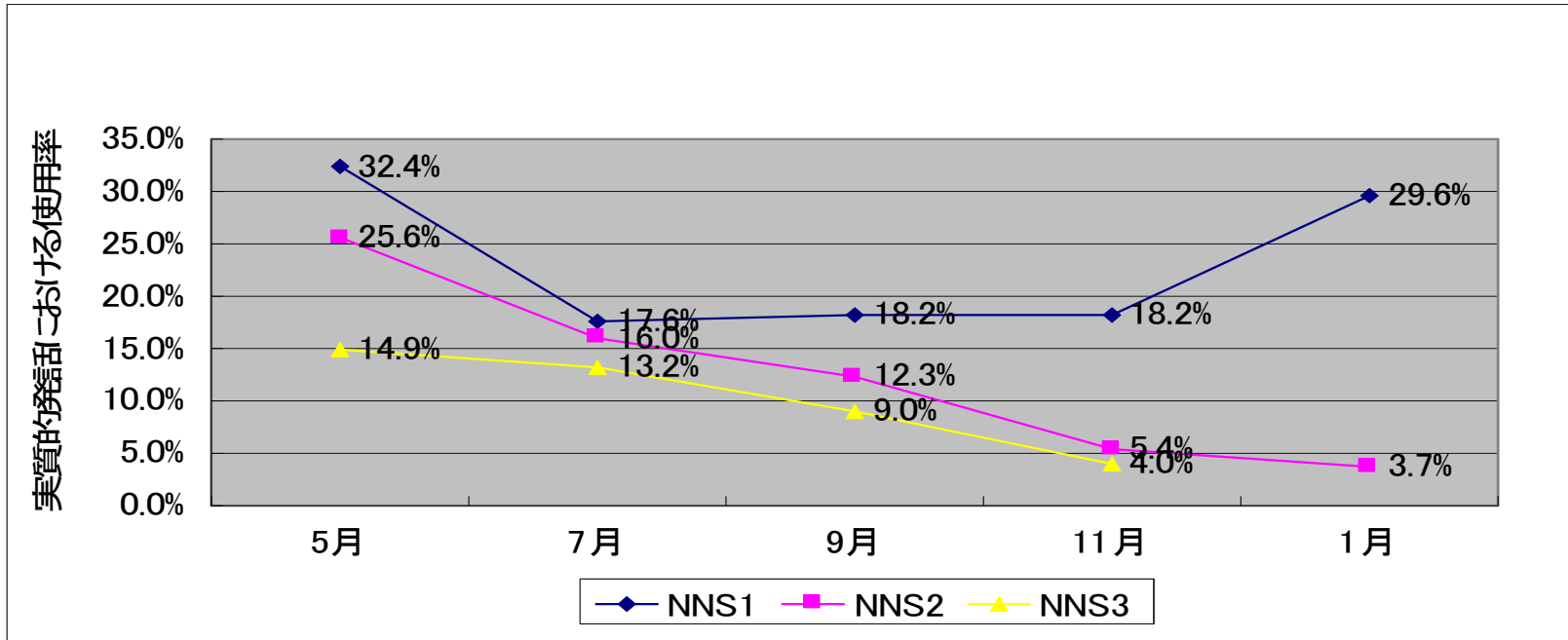
実質的発話におけるストラテジーの使用率

実質的発話におけるストラテジーの使用率(NNS1の場合)

時期	5月		7月		9月		11月		1月		計
	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	
Aコード	2/	2.7	0/	0.0	0/	0.0	0/	0.0	0/	0.0	2/ 0.4
B逐語訳	1/	1.4	2/	1.7	0/	0.0	1/	0.9	2/	1.7	6/ 1.2
C一般化	1/	1.4	0/	0.0	1/	1.1	0/	0.0	0/	0.0	2/ 0.4
Dパラ	4/	5.4	5/	4.2	0/	0.0	7/	6.4	5/	4.3	21/ 4.1
E造語	1/	1.4	1/	0.8	1/	1.1	0/	0.0	1/	0.9	4/ 0.8
F再構築	2/	2.7	1/	0.8	2/	2.1	1/	0.9	0/	0.0	6/ 1.2
G確認	9/	12.2	5/	4.2	4/	4.3	7/	6.4	18/	15.7	43/ 8.4
H理解	0/	0.0	0/	0.0	0/	0.0	1/	0.9	0/	0.0	1/ 0.2
I間接	4/	5.4	7/	5.9	4/	4.3	3/	2.7	7/	6.1	25/ 4.9
J直接	0/	0.0	0/	0.0	0/	0.0	0/	0.0	1/	0.9	1/ 0.2
合計	24/	32.4	21/	17.6	12/	18.2	20/	18.2	34/	29.6	111/ 21.7
実質発話	74		119		94		110		115		512

◇使用回数しか見ていない先行研究は学習者のストラテジー使用を正確にとらえきれない問題がある。

量的変化



◇戦略使用はレベルが高いほど減少するという(富山(1995))。

「横断的に、初級から超級までの日本語学習者20名の発話ストラテジー」

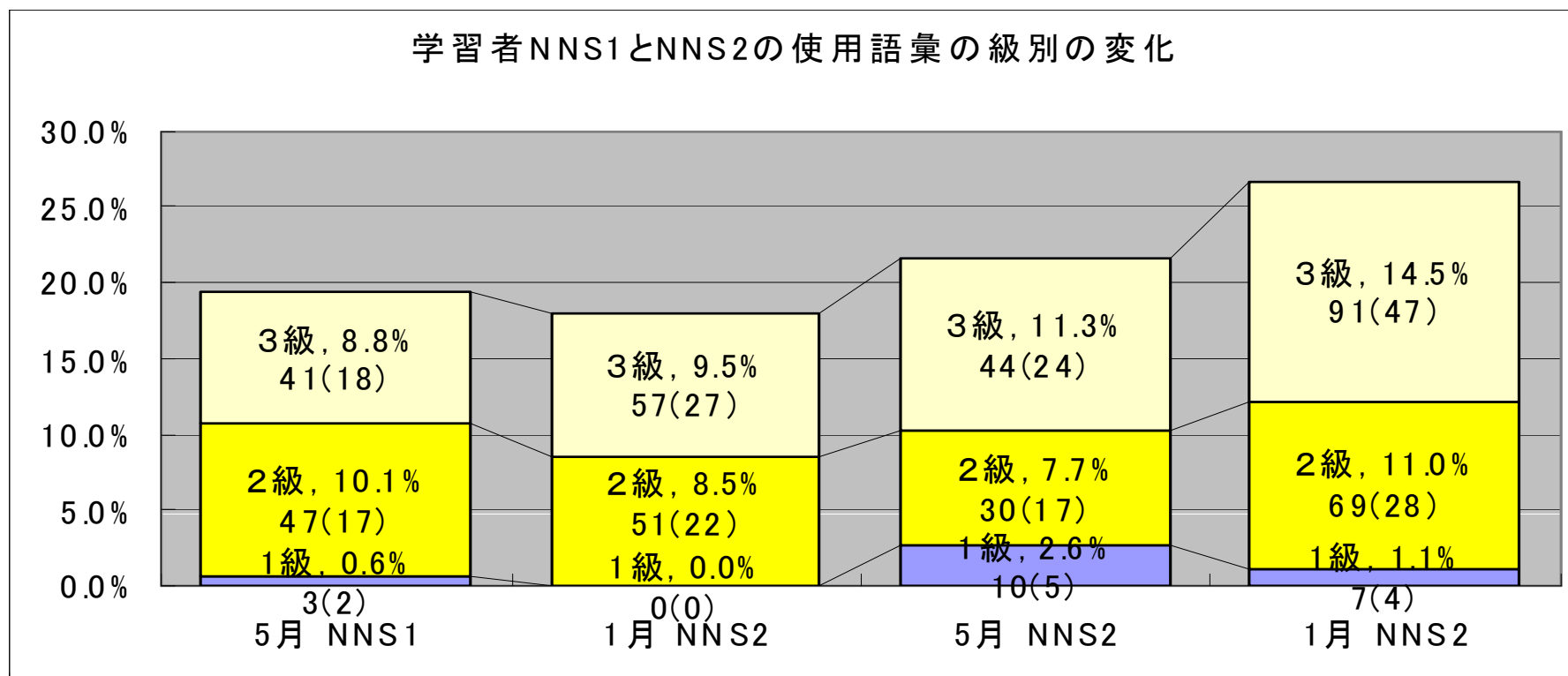
言語能力の変化との関係

使用語彙調査と日本語能力試験

◇日本語能力試験：NNS1⇨2級→1級**失敗**

NNS2⇨2級→1級**成功**

◇使用語彙調査：「リーディング・チュウ太」(川村2001)



量的変化からの結論

- ➡ 先行研究の富山(1995)の**横断的研究**の結果を**縦断的なデータ**で、ある程度裏付けることができたと思われる。
- ➡ 滞日期間が長くなるにつれ、言語能力が高くなれば、発話ストラテジーの使用は減少すると思われる。
- ➡ ストラテジー使用の量的変化は、滞日期間の長短というよりは、その期間中における言語能力の変化と大きく関連している。

質的变化(NNS1)

共同解決型・間接的アピール

◎間接的に相手に助けを求めるもの、文を途中まで言ったり、言いよどんだりして、運用力の限界を示すこと

<二回目>

114NNS1うん、ぜんぜんわからない、なんか、んー、なつやすみと冬休み、(うん)ときどき、あのう、図書館であのう、ほん、ほんをよんで、え、え[↑、読むー[声が非常に小さい]。]

115NS1読む。

116NNS1うん。

117NS1読んでみたい。

118NNS1よ、よ、よみたい。

119NS1よみたい。

120NNS1はい、はい、はい[二人で笑いながら]あのう、れきし、日本の歴史、あのう、しっ、しっていた(うん)あとで、あのう、日本史をと、取ります。

<三回目>

32NS1うん、いま、さん[先生の名前]先生？。

33NNS1そう、あの、来年、[先生の名前]先生は中国(うん)行った、だから、あのう、あのう…[小さい声で]。

34NS1/沈黙 4秒/あ、取れないわけだ。

35NNS1はい、そうそうそう。

調整の観点から見る共同解決型

共同解決ストラテジー	調整の特徴
確認要求	自己マーク他者調整「調整リクエストマーカ―」
理解の確認要求	自己マーク他者調整「調整リクエストマーカ―」
間接的アピール	自己マーク他者調整「 不適切マーカ― 」
直接的アピール	自己マーク他者調整「調整リクエストマーカ―」

	語彙レベルでの操作	文レベルでの操作
調整マーカ 一言語形式	「んー」「なんか」「沈黙」「問題源 の繰り返し」	「だから」の使用
相手の反応	沈黙、繰り返し、問題解決に至 るまで複数のターンが使われる	文脈を利用し、文を完成させた 。問題解決は問題の発生の次 のターンで完了

質的变化：よわい伝達⇒つよい伝達

- ◇弱い伝達では：話し手のメッセージから導出する推論に幅がある
- ◇強い伝達では：聞き手が想定を選択できる余地が少ない
Cameron and Williams(1997)

⇒伊藤(2000)では、**教室環境**の**初中級**学習者の**協力的ストラテジー**について、縦断的に考察を行ったところ、数の変化こそあるものの、**形式的**は特に**大きな変化**が見られなかったという。

⇒理由として①学習環境の違い、②能力の違い、③対話相手の違い(友達とOPIのテスター)

課題3成功率から見る言語能力とストラテジー能力との関係

		使用数	成功数	成功率
NNS1	自己解決	41	31	76%
	共同解決	70	57	81%
	合計	111	88	79%
NNS2	自己解決	21	14	67%
	共同解決	34	27	79%
	合計	55	31	75%
NNS3	自己解決	20	15	75%
	共同解決	13	7	54%
	合計	33	22	67%

結論

- ◇滞日期間が長くなるにつれ、言語能力が高くなれば、発話**ストラテジー**の使用は量的に減少すると思われる。
- ◇質的には、間接的アピールの使用に**弱い伝達から強伝達への変化**が見られ、その理由として、学習者の学習環境の違いや、学習者の能力の違いなどがあると思われる。
- ◇成功率からみて、**言語能力が低いからといって、ストラテジー能力が低いとは限らない**。実際のコミュニケーションの場面における使用（実践）が非常に大きな役割を果たしている。

主要参考文献

- 石田 孝子・林 伸一 (1994)「日本語学習者の発話に見られるCS」『平成6年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp.121-126 日本語教育学会
- 伊藤 かな (2000)「初中級日本語学習者の用いる協力ストラテジーについて」『岐阜大学留学生センター紀要』pp.38-52
- 荻原稚佳子 (1996)「日本語学習者のCS使用の縦断的研究」『講座日本語教育』31分冊 pp.74-92 早稲田大学日本語研究教育センター
- 大野 陽子 (2003)「初級日本語学習者のCS「発話ストラテジー」使用についての考察—」『三重大学留学生センター紀要』第5号pp.55-65
- 大野 陽子 (2004)「中級日本語学習者の「発話ストラテジー」使用についての考察」『三重大学留学生センター紀要』第6号pp.83-93
- 宇佐美まゆみ(2007)「改訂版:基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese : BTSJ)2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度 科学研究費補助金 基盤研究B(2) (研究代表者 宇佐美まゆみ) 研究成果報告 <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj070331.pdf>
- 金 シミン・赤堀 侃司 (1999)「日本語学習者を対象にしたコミュニケーション方略のトレーニング効果の分析」『日本語教育』93号pp.49-60 日本語教育学会
- 佐々木良造 (2007)「発話能力を補うCSとは」『言語科学論集』第11号 pp47-58 東北大学文学部言語科学専攻 編
- 杉戸 清樹 (1987)「発話のうけつぎ」『国立国語研究所報告92 談話行動の諸相 談話使用の分析』pp.68-106 三省堂
- 武井 直紀 (1995)「CSとコミュニケーション能力」『日本語の研究と教育 窪田先生富男教授退官記念論文集』第2号pp.116-132 専門教育出版
- 野原美和子 (2000)「学習者が自己修正時に用いるCSとは」『岐阜大学留学生センター紀要』pp.53-63
- 横林 宙世 (1991)「日本語初中級学習者の使用するCS」『平成3年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.39-44 日本語教育学会
- 藤長かおる (1996)「初中級日本語学習者のコミュニケーション能力についての一考察—話し手としてのCSの考察—」『日本語国際センター紀要』第6号 pp.51-69
- Jefferson,G. 1972 'Side sequences' in D.Sudnow (ed.): Studies in Social Interaction. New York : Free Press.
- Poulisse,N, 1997 "Compensatory strategies and principle of clarity and economy," in Communication Strategy, ed Kasper,G & Kellerman,E pp.49-64, Longman Ltd , New York ,